

の西欧から新たにつくられた「トルコ・アレヴィー」が、逆にトルコに影響を与えた。特に一九九三年のスイヴァス事件の影響は大きく、それ以降、アレヴィー／アレヴィーリキはマスコミにも、政治の世界の認識の中でも確固たる位置を占めるようになる。近年の二〇〇九—一〇年にかけてのアレヴィー協議会は政府主導であることもあったが、これまでの動向を見てみると、宗教と文化の間で(そして政治の影響下で)揺れながらも、アレヴィー／アレヴィーリキの認識が変化・変容してきていることを示すものでもあった。

『科研費課題「アレヴィー関連諸集団とアレヴィー・エスニシティの生成と展開」(課題番号21401042)(代表者:佐島隆)による成果の一つである。』

グローバル化の中のイスラム

——イスラムの市場価値化をめぐる——

八木久美子

現在、イスラム世界の各地で新しいタイプの説教師が活躍している。ここで焦点を当てるエジプトでは、「新しい説教師」、「モダンな説教師」などと呼ばれているが、その理由は、スタイルの新しさ以上に、社会的にウラマーと認知されない人物がイスラムを語るという現象の新しさにある。彼らはウラマーには語りえないことを語り、イスラム的言説の可能性を広げてきた。しかし見方を変えれば、ひとつの問題が浮上する。彼らの

語りが人々の関心を集めるのは理解できるとしても、ではなぜ、それがイスラム的なものとして流通しているのかという問いである。

この発表では、新しい説教師のなかでも、人材育成や能力開発といった、通常、ビジネス界の関心事項とされる分野、つまり伝統的なイスラムの言説とは最も親和性が低いと思われる分野で活躍している人物の例を取りあげる。彼らが活躍する最大の場はもちろんテレビである。

アムル・ハーレドに関して言うと、彼は新しいタイプの説教師を代表する人物として評価は確立している。そのハーレドが、昨年放送された「改革者たち」という番組で、番組の狙いとして掲げていたのはボランティア活動を成功させるための技術の伝授であった。若者たちがチームで番組に参加し、限られた時間と資金を使って、孤児院での奉仕など、与えられたテーマをいかに効率よく成し遂げるかが競われた。勝敗を決める上で重視されたのが、作業効率、計画性などきわめて実務的な事柄であったことは重要である。

イブラーヒーム・アル・ファイキーは、人材育成、能力開発のコンサルタントであるが、彼が「成功の道(方法)」という番組で語るのには、ビジネス界で成功するための具体的なノウハウ以外のなものでもない。それにも拘わらず、この番組が宗教的な番組と受け取られているのは、これがイスラムを専門とするチャンネルで放送されていたからである。

九〇年代に衛星放送が開始されたことでチャンネル数が急増し、テレビの世界に市場原理が入り込んだが、それは宗教に特

化したチャンネルについても言える。テレビの世界に姿を現すイスラムに関し、視聴者の志向やニーズが決定的な意味を持ち始めたのである。明らかに反イスラム的な内容でもない限り、視聴率を稼げる人物やテーマは採用され、そうしたチャンネルに登場するものは翻って、イスラム性を獲得する。こうしたプロセスにおいて、ウラマーは無力というわけではないが、その影響力は限定的と言わざるを得ない。

今、人々は消費者あるいは生活者として、何を買うか、何を見るか、何を使うかを決定することを通して、ムスリムとしての自己実現を成し遂げようとしている。その結果として、イスラムは、市場において大きな力を持つにいたる。この傾向に拍車をかけるのは、グローバル化によるモノや情報の横溢であり、そのなかでは消費者が選択という行為を迫られるという事実であろう。消費者は、選ばなければならなくなり、その際ひとつの重要な基準として「イスラム性」が浮上するということである。

イスラム法の専門家から見れば完璧なものであっても、消費者に選ばれなければその商品も、その番組も淘汰される。選ばれたものだけが、「イスラム的」商品、「イスラム的」番組として生き残る。そうして生き残ったものが、これからのイスラムのありようを大きく規定していくのではないかと考えられる。

仏教徒が語るアッラー

——教義の壁への挑戦——

小布施 祈恵子

仏教とイスラームは世界宗教の中で最も教義的にかげ離れたものだと考えられており、「無神論」的教えを奉じる仏教徒と「厳格な一神教」徒であるムスリムとの間には相互理解が成立しにくい、とさえ言われることもある。確かにこれまで両者の共通点としてはスーフィズムと禅や倫理・道徳の教えの類似点が指摘される程度であった。また仏教徒とムスリムの相互言及を見ても、ムスリム側からは、仏陀を預言者の一人とみなすことによって仏教に一定の評価を与えようとする動きが少なからず存在してきたが、仏教徒が仏教の教義の枠組みを使ってイスラームを解釈することは稀であった。しかし宗教紛争やいわゆるテロ活動などを通して宗教間の関係が重要視されるにつれ、現代仏教徒の中に仏教とイスラームの間に教義的つながりを見出し、両者の関係の改善をめざす試みが現れてきた。本稿では現代仏教徒によるイスラームへの言及の中から、教義の観点を通して系統的に友好的な議論を展開している例を三つ紹介し、その意義を考察する。

一つ目は、タイ出身のテラワダ仏教の指導者ブッダダーサ比丘（一九〇六—一九九三）による見解である。彼はすべての宗教は「空」を究極の真理として共有していると主張しており、仏教以外の宗教で「神」と呼ばれるものをダンマ（法）と同一視している。また彼は「すべての国に使徒が遣わされる」